

# 富籤

ВЫИГРЫШНЫЙ БИЛЕТ

アントン・チェーホフ Anton Chekhov

青空文庫



イワン・ドミートリツチは中流階級の人間で、家族と一緒に年に千二百ルーブルの収入で暮らして、自分の運命に大いに満足を感じている男であつた。或る晩のこと夜食のあとで、彼は長椅子ながいすの上で新聞を読みはじめた。

「私、今日はうっかりして新聞も見なかつたのよ」と彼の細君が、食器のあと片付けをしながら言つた。

「あたかり籤くじが出てないか、ちよつと見て下さいな。」

「ああ、出てるよ」とイワン・ドミートリツチは言つた、「しちながだ、お前の富札は質流れになつてるんじゃないのかい？」

「いいえ、火曜日に利子を入れて置いたのよ。」

「何番だったね？」

「九四九九号の二十六番ですわ。」

「よしよし、……ひとつ探してやろう。……九四九九の二十六と  
」。

イワン・ドミートリツチは籤運などは信用しない男であったから、ほかの時なら何と言われたって当り籤の表など振り向きもしなかつたにちがいない。けれど今はほかに何のすることもないし、おまけに新聞がちょうど眼の前にあるので、彼はついその気になつて番号を上から下へと指で追つて行つた。するとたちまち、まるで彼の不信心を嘲あざわら笑うかのように、九四九九という数字が彼の両眼に跳とびついて来た。彼はもう札の番号などには眼もくれず

見直しもしないで、いきなり新聞を膝ひざの上に落としたかと思うと、まるで自分の腹の上に冷水でもはねかけられたように、鳩尾みずおちのところところに冷やりと実にいい気持がした。擦くすくすつたいような、空恐ろしいような、妙に甘つたるい気持がした。

「マーシヤ、あつたぞ、九四九九が！」と彼は胴間どうまごえ声をあげた。細君は彼のびっくりしたような呆あきれ返つたような顔をじろじろ眺めて、これはふざけているのじゃないと思つた。

「本当に九四九九なの？」と彼女は顔色を変えて、折角たんだテールクロスをまた卓の上にとり落としてしまった。

「そうだ、本当なんだ……本当にあつたぞ！」

「でも、札の番号はどう？」

「あ、そうだっけ。まだ札の番号って奴があるんだね。だが、お待ち。……ちよつとお待ち。いいや、それが何だというんだ。どつちみち、俺たちの番号はあるんだ。どつちみちだよ、解わかるかい？……」

イワン・ドミートリツチは細君の顔を見ながら、まるで赤ん坊が何かきらきらする物を見せられた時のような、幅つたるいぽかんとした笑顔になった。細君も笑いだした。彼がただ号の番号を言っただけで、この幸運の札の番号を急いで探さないとところが、彼女にもやはり楽しみだったのである。ひよつとしたら舞しらい込むのかもしれない幸運の期待で、自分の心を苛いら立たせ焦じらすのは、何とまあわくわくして面白いんだろう！

「俺たちの号はあつたんだ」とイワン・ドミートリツチは少し黙つてから言いついだ、「つまり、俺たちが当たったのかもしれない見込みがあるんだ。見込みだけなんだよ。けど、その見込みは儼然げんぜんとしてあるんだ。」

「そうよ、だから見て御覧なさいよ。」

「待て、待て。幻滅の悲哀を味わうのはまだあとでもいいさ。上から二行目だから、つまり七万五千ルーブルという訳だ。そうなるともうお金じゃない、力だ、資本なんだぞ。今すぐ、ひよいとこの俺が表をのぞいて見る、——すると、ちゃんと二十六なんだ。ええ、どうだね。俺たちが本当に当たっていたら、いったいどうなるんだね？」

夫婦は思わず笑いだして、もう何も言わずに長いことお互いの顔を見詰め合っていた。幸運が舞い込むかもしれないという考えで、二人ともすつかりまごついてしまった。この七万五千ルーブルで何をしようか、何を買おうか。どこへ出かけようか、——そんなことは思いにも浮かばず口にも出せなかった。彼等はただ、九四九九と七五〇〇〇〇という数字のことばかり考えていた。その数字ばかりを思いに描いていた。大いに可能性のある幸福それ自身の方へは、どうした訳か考えが向かなかつた。

イワン・ドミートリツチは新聞を両手に握りつぶしたまま、部屋の隅から隅へと二、三回往復した。そしてやっと最初の深い感動がしずまって来たとき、少しずつ夢をやり始めた。

「俺たちが当たったのだとしたら、どうなるんだ」と彼は言った、  
「それこそ新生涯だ、大団円だ。札はお前のだが、もしあれがこ  
の俺のなら、俺は勿論もちろんまず第一着に、二万五千ほど投げ出して  
何か地所といったような不動産を買い込むね。それから一万はそ  
れにくつついてくる色んな費用に充てるあ。造作のやり直しとか、  
旅費とか、税金とか、そんなものにね。……あとの残りの四万は  
銀行に預けて利子を取るんだ。……」

「そうね、地所は素敵だわ」と細君は言つて、両手を膝の上に着  
としながら坐り込んだ。

「どこかツラかオリヨル県あたりがいいな。……第一に、別荘  
なんかは要らないし、第二に、と言つて上り高あがだかは確かでなくちや

あね。」

そして彼の想像のなかに色々な光景が群がり寄せて来て、それがだんだんといよいよ美しくいよいよ詩的になって行つた。そのどの光景の中に坐っている彼の姿も、みんな満腹しきつて、安楽で、健康で、温かいどころか熱いほどだった。いま彼はオクローシカという氷のように冷たい夏向きのスープレを詰めこんで、川岸の熱いほど焼けた砂の上に仰向けに寝ころがる。それとも庭の菩ぼ提だいじゆ樹の蔭の方がいいかな。……とにかくとても暑い。……小つぽけな男の児こや女の児たちが、自分の身のぐるりを這はい廻まわりながら、砂を掘つたり草のなかのてんとうむし瓢虫を捕まえたりしている。何これと言つて考えることもない。ただ甘い夢ふけ想に耽ふけつてゐる。今

日も、明日も、明後日も勤めに出なくていいのだ、とそんなことを身体ぜんたいで感じている。寝ころんでるのが厭あきてくると、こんどは乾草の原っぱへ出かけたり、森へ茸きのこをとりに行ったり、でなければ百姓が投網とあみをするのを見物する。日が沈むと、タオルや石鹼せっけんを持ってゆつくりと歩いて水浴場へ行く。行つてからも別にせかせかせずに、悠々ゆうゆうと着物を脱ぎ、裸になった胸を丁寧に掌てで撫なでまわしてから水につかる。水の中には、ぼんやり透いて見えるシャボンの環わのまわりを、小っちゃな魚たちがちらちらしているし、また青々した水草の揺れるのも見える。水浴がすむと、クリームと牛乳入りのビスケットでお茶を飲むことにする。

……晩は、散歩をするかそれとも近所の人たちと骨牌カルタをやる。

「そうね、地所が買えたらとてもいいことね」と細君もやはり何やら空想しながら言った。すっかり自分の考えで魔法にかかつてしまっていることは、その顔で、よく解った。

イワン・ドミートリツチは引きつづいて秋の光景を描いて行つた。時雨しぐれ、肌寒い晩がた、それから小春日和。……この季節には庭や菜園や川岸などの散歩はいつもより少し長めにしなければならぬ。それは、そうしてすっかり身体を冷え切らせておいてから、大きな盃さかずきでヴオト力をぐいとやるためなのだ。それから塩漬ういきようけの茸か 茴香ういきよう漬けの胡瓜をちよつとつまんで、またもう一杯ぐつとやる。子供たちは菜園から人にんじん参や大根の土の香のぷんぷんする奴を引っこ抜いて駈け出して来る。……やがてこんどは長

椅子に思いきり手足を伸ばして寝そべり、何か絵入り雑誌を眺める。そのうちに、その雑誌を顔の上に伏せてチョッキのボタンをはずし、うつらうつらと夢路を辿る。たど……

小春日和が過ぎると、曇った陰気な季節になる。夜昼の境目もなく長雨が降りはじめ、裸になった木々が泣く。冷たいじめじめした風が吹く。犬も馬も鶏もみんなびしょ濡れで、しよげ返って小さくなっている。散歩どころか家からひと足だつて出られない。一日じゆう部屋の中を行ったり来たりして、怨めしそうに陰気な窓を睨にらんでいなければならぬ。ああ退屈だ。

ここまでできたとき、イワン・ドミートリツチは考えを中止して細君の方を見た。

「ねえ、マーシャ、俺はそれよりも外国へ出かけるね」と彼は言  
った。

そして彼は、晩秋になつて外国へ出かけたらどんなに素晴らしい  
だろうと考えはじめた。どこか、南仏か、イタリアか、それとも  
インドあたりへ。

「私だつて、きつと外国へ行きますわよ」と細君が言つた、「も  
ういい加減で札の番号を見てちようだい。」

「お待ちよ、まあ、もう少しお待ちよ。……」

彼はまた部屋の中を歩き出して、空想をつづけた。こんな考え  
が浮かんで来た。——本当に女房も外国へ出かけるとしたらどん  
なことになるだろう。旅をするならひとり旅に限る。さもなけれ

ば、浮気で明けっぱなしで、その時々のことしか考えぬ女たちと一緒に限る。ところが、俺の女房ときた日にや、旅行の間じゅう子供たちのことばかりよくよ心配して話すだろう。溜息ためいきはつき通しについて、一コペック出すにもびくびくと顫ふるえるだろう。……イワン・ペトローヴィチは細君が汽車の中で、どつさりの包みだのバスケットだの合財袋のなかに埋って坐っている有様を想像した。旅の疲れが出て頭痛がするとか、大変なお金を使ってしまったとか言って、溜息をつきながらぐずぐず言っている。汽車が停まると自分は、お湯だのバターパンだの飲料水だのと言って、停車場じゆうを駈け廻らなければなるまい。……女房は高いと言つて食堂車へはとでも行くまい。……

『だが女房は俺にもとてもけちけちするだろうな』と彼は細君をじろりと眺めて考えた、『あの札は女房なので、俺のじゃないんだからな。それにしても、いったい女房なんか外国へ出かけて何になるんだ。結局行かないのも同じことさ。ホテルに閉じこもったきりで、この俺まで傍から放しはしまい、……ちやんと解つてるさ。』

そして彼は生まれてはじめて、自分の細君がすっかり老けふこんで、容色きりようが落ちて、身体じゆうぬかみそ糠味におの臭いが滲しみこんでしまつてい、いっぽう自分の方はまだ若く、健康で、新鮮で、もういちど結婚してもいいほどの男振りなことに気がついた。

『そりや勿論こんなことはみんな、詰つまらぬ馬鹿げきつたことさ』

と彼は考えた、『だがだ、……女房が外国へ出かけてどうしよう  
と言うんだ。行つたつて何が解るものか。それなのに、女房はき  
つと出かけるにちがいない……、ちやんと解つてるさ。……とこ  
ろが女房にとつちや本当のところ、ナポリもクリンも同じことな  
んだ。ただ俺の邪魔がしてみたいのさ。俺はきつといちいち女房  
に束縛されちまうにちがいない。解つてるさ、お金を受け取つた  
ら最後、女の流儀ですぐさま錠前を六つも掛けてしまふのさ。……  
俺には拝ませてもくれないんだ。……自分の親類にばかりぱつ  
ぱして、この俺には一コペックごとにけちけちするんだ。』

イワン・ドミートリツチは細君の親類のことを思い出した。兄  
弟たち、姉妹たち、伯母さんたちに伯父さんたち、どれもこれも

みんな籤が当たったことを耳にするや否いなや這いこんできて、脂あぶらっ  
こい笑顔をとり繕つくろいながら乞食こじきみたいにねだりはじめるだろう。  
実に根性のまがった厭いやな奴らだ。いっぺん遣やつたら後を引くし、  
もし遣らないと、呪のろつたりくだらぬことを言いふらしたり、色ん  
な仕返しをはじめるんだ。

イワン・ドミートリツチはこんどは自分の方の親類を考えはじ  
めた。すると今まで何の気もなしに眺めていた彼等の顔つきが、  
胸のむかつくほど憎らしくなった。

『実に何たる害虫どもだ！』と彼は思った。

すると細君の顔までが厭な、憎らしいものに見えはじめた。細  
君に対する遺恨で胸のなか煮えくり返って、彼は憎々しげに考

えた。

『この女は金に対する観念なんかまるでないんだ。だからけちけちするんだ。もし籤が当たったとしても、この俺には百ルーブルとはよこすまい。あとの残りは——錠前だ。』

そして彼は笑顔どころか、憎悪に燃えた眼つきで細君を睨みすえた。彼女の方でも嫌悪と怨<sup>えんこん</sup>恨のごちやまぜになつた眼で夫を睨み返した。細君にも自分の計画や思惑や、虹霓<sup>にじ</sup>のような夢想があるのだった。そして自分の夫が今なにを空想しているか、とてもよく察しがついた。自分の当り籤にまず第一に熊手を差し出す者は誰なのかを細君は知り抜いていたのであった。

『他<sup>ひと</sup>人の懐を当てにして、よくもそんないけずうずうしい事が考

えられたものね!』と細君の眼が語っていた、『いやなことだわ、あなたにそんな事をさせてなるもんですか!』

夫は細君の眼を読んだ。すると彼の胸は嫌悪でいっぱいになってしまった。そこで彼は細君をやつつけるために、構わず新聞の第四面に眼を投げると、いとも厳かな口調で読みあげた。――

「九四九九号、第四十六番、二十六番に非<sup>あら</sup>ず。」

希望も憎しみも、両方ともいつぺんに消え失せてしまった。たちまち、イワン・ドミートリツチにも細君にも、その部屋が薄暗く狭苦しく安っぽく見えはじめ、今しがた食べた夜食さえもがちつとも腹の足しにならずに、ただ胃の腑<sup>ふ</sup>の下のところにはぼとんと溜<sup>たま</sup>っただけのような気がした。宵<sup>よい</sup>の時間までが長ったらしく退屈

で堪らなくなつた。……

「一体これは何という態さまだ！」とイワン・ドミートリツチはそろそろだだを捏こねはじめた、「一步あるけば、きつと紙屑かみくずを踏ふんづけるんだ。見ろ、この何だかの屑や殻を！ 一ぺんだつて箒ほうきを手にしたこともないんだ。こいじや、厭でも出て行きたくなる。悪魔めにさらわれてみたくなつちまう。俺は出て行くぞ。そして一番先にぶつかつた柳の木で首を縊くつちまうぞ！」

(ВЫИГРЫШНЫЙ БИЛЕТ, 1887)



# 青空文庫情報

底本：「カシタンカ・ねむい 他七篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年5月16日第1刷発行

2008（平成20）年6月25日第2刷発行

底本の親本：「チエーホフ全集 第六卷」中央公論社

1960（昭和35）年発行

入力：米田

校正：noriko saito

2010年7月5日作成

2012年2月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 富籤

ВЫИГРЫШНЫЙ БИЛЕТ

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫  
著者 アントン・チェーホフ Anton Chekhov  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>